

沙羅の樹文庫だより

NO. 198 (23年5月号)



ピエール・ド・ロンサール



アプリコット・キャンディー



シヨッキング・ブル

これからだ

坂村真民・詩

みどりの風よ
これからだ

さえざる鳥よ
これからだ

みちくる潮よ
これからだ

もえでる葦よ
これからだ

わたしの生よ
これからだ

本年も3密を避け予約制で開館しています

2023年

5月20日(土)、21日(日)

★5/21、若葉のころのおはなし会★

小さい人向け AM(10:30~11:45)

大きい人向け PM(1:30~3:45)

6月17日(土)、18日(日)

7月15日(土)、16日(日)

8月19日(土)、20日(日)

9月16日(土)、17日(日)

開館時間：土曜日 13:00~17:00

日曜日 10:00~15:00

子どものための読み聞かせ・おはなし会

日曜日 10:30~11:00

おはなし沙羅・おはなし勉強会

土曜日 10:30~12:30

〒413-0235 伊東市大室高原 7-122

☎0557-51-3737 (090-6039-3782)



沙羅の樹分館ゆるかの里子ども文庫

〒413-0232 伊東市八幡野 924-1

☎0557-54-1910

開室日：水曜日 13:00~15:00

：日曜日 10:00~15:00



京・鴨川の季節の装い(納涼の川床が作られて...)

:4/21 城陽市 Tさん京ブラより

文庫あれこれ ◦ 今月は、バラの咲く頃になると毎日写真を撮って送ってくれる友人 S さんからのバラ三昧です。 ◦ 長い? 連休も終わりましたが、その間にも、コロナの取り決めが緩められ、能登では大きな地震が続き、もっと身近の争いに日本は巻き込まれた(否、積極的に関わり始めた? ような)みたいです。 ◦ 今朝(5/19) 早朝、小絞鶏? がちょっと来い、ちょっと来い、と鳴いていましたが、今はウグイスが鳴いています。曇ってはいますが、昨日のような暑さには? ◦ できれば、明日明後日雨になりませんように! ◦ 文庫での<若葉のころのおはなし会>も開館以来続いて(20、21年だけコロナで休止)います。このおはなし会は文庫を閉じても続けられたらなあ、と思っています。ここ地元での語り手も随分と上手になりました。それで、伊豆新聞の「1週間前事情報」に載せていただくようお願い。結局は、昨木曜日に載りました。Kさんが知らせてくれました。これを見てどなたか来てくださるといいなあ、です。 ◦ いつもしつこくおはなし会について書かせていただくのですが、この辺りではあまり関心がないようで残念。子どもには、読書に誘う方法として読み聞かせや物語を語るの全国的なのですが、やはり、この地では? お母さん方に関心がないのかなあ。お稽古事で時間がないのかなあ、と。でも、思い出します。17年前文庫開館を伊豆新聞に載せていただいたら、30数人の方が聴きにきてくださったのを♡。その方々がみんなその後、会員になって今の文庫は続いてきたわけです。 ◦ 先日、世田谷で50周年を迎えた文庫のおはなし会に行ってきました。山の木文庫さんは、沙羅の樹にも皆さんで来てくださり、その時子どもが語ってくれたのを見て、うちの文庫の子どもたちが語り始め、海の日のおはなし会に語るようになったのです。と、年寄りも昔を懐かしんでおりますが



希望

フルグラント・ヒル



はてさて、21日日曜日、来てくださる方は? ずっと友人が送り続けてくれている新潟の<笹団子>食べられますよ!! ◦ 今月

新刊は、小説はあまりなく、ちょっと西村好みをに入れてしまいました。それと、いただいた古

思い出すことⅡ

～子どもの本から海を超えてイギリスへ～池村 奈津子 (京都子ども文庫連絡会)

我が子と本を読み始めて約50年。子どもたちが読書自立してから、私も自分の好きな本を読むようになりました。当時気に入っていたフィリパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』『ハヤ号セイ川をいく』『まぼろしの小さな犬』を再読しながら、イギリスへ行ってみたくてという思いを持った1985年の春。トムが登ったイーリーの塔に登りたい。ケム川に沿って歩いてみたい。『トム』に出てくるアランおじさんのアパートを見てみたい。読みながらそんな思いを抱いていました。「行ってみたい」とはいうものの、当時の生活では子どもを置いて外国へ行くなど全く考えられないことでした。あくまでも、それは夢としてのもの、憧れでした。

トムとハティが真夜中の庭で会うということが、彼らにとって夢の世界なのか現実の世界なのか。ベンが目をつむって幻の犬を見ることがあるのか。私の日常も夢と現実が交差して見えました。目をつむることによってそのものを見る。この不思議な世界に自分自身を置いて、大人であることを忘れどっぷりと浸かって読んでいました。それなら原書も読んでみよう。

1986年の夏に「子どもの本世界大会」が東京青山子どもの城で開催され、ピアスが基調講演者として来日するという情報が入り、私



は何はさておき参加しました。東京・大阪・京都と講演を梯子。ピアスさんにサインをして貰った時、彼女は私に名刺を渡し、「ケンブリッジに来たら電話を」と言ってくれたのです。いつか、きっと。実現するのはいつのことか。まだこの時も夢として。

1992年春、夫が単身赴任から戻ってきました。よし、チャンス到来。計画実行。ピアスさんに手紙でイギリスへ行く予定を知らせた



のです。彼女から「ケンブリッジに着いたらお電話を」という返事が届き、ますます現実味が帯びてきました。

そして実現したのです！ケンブリッジからピアスさんに電話。勿論、お目にかかることが出来ました。

庭の林檎がポトンポトンと落ちる音を聞きながらのティータイム。そして、それからというものピアスさんとの再会やイギリス児童文学の背景巡りの旅を続けたのは言うまでもありません。



(奈津子さん、すご〜い！ あなたの行動力とピアスさんとのご縁、素晴らしいです!!)

徒然なるままに・・・ (さ・ら)



皇居大手門前、🌸 整然と。GW

★GW 旅なし久しぶり。このまま旅なしかも。★それで、映画を観てきました。

「銀河鉄道の父」門井慶喜原作。昨年の直木賞だったので、読んだ方も多いと思います。食べず嫌いの私は、賢治は苦手、と、端折り読みしかしてこなかったのですが、この映画の中の愚直な賢治に強いエンパシーを感じました。「雨にも負けず」の最後「サウイモノニワタシハナリタイ」が少しわかった気がしました。賢治の父を描いているのに、父は勿論のこと、賢治、妹、弟、そして母を、家族を愛情込めて描いて、自然に優しい涙が流れ続けました。演じている役者それぞれも、出張っていないのに、個人と家族のひとりとしてを見事に見せてくれました。★友人の語りを聴いて、町田から昨日文庫へ直行。驚いたのは、庭のたんぼぼや雑草が仲が放題の生前から60年、同じ植木屋



さんをお願いして、毎月来ててもさっぱりした気持ちの良い庭を眺められました。が、今年に入って2代目さんが腰を痛めてもう仕事ができないと。いくつか土事をしてくれる人を娘が探し

てはくれたのですが、みんな高い！ とまあ、そういうことで植木屋さん未定。会員さん、しばらく我慢してください。

Watch your step!

バラの花：ブランディー(上)

：イモーゼン(右)



23.5月に入る子どもの本

絵本

- 『やまのこどもたち』(石井桃子作 深沢紅子絵 岩波書店 1956) ID13900
『名馬キャリコ』(バージニア・リー・バートン 文・ぶん せたていじやく 岩波書店 1979) ID13901
『せんろはつづくよ』(M.W.ブラウン文 J.シャロー絵 与田準一訳 岩波書店 1979) ID13902
『すいどう』(百木一朗著 福音館書店 2022) ID13903
『にぎやかもりのツリーハウス』(新井悦子作 どうかや絵 フレーベル館 2023) ID13904
『なんてくさいんだ! ロンドンを救ったジョセフの物語』(コリーン・ペフ文 ナンシー・カーペンター絵 金原瑞人訳 あかつき教育図書 2023) ID13905
『オキナワの家』(伊礼智著 インデックス・コミュニケーションズ 2004) ID13911
『2ひきのカエルーそのぼうき、どうすんだ?』(クリス・ウォーメル作絵 はたこうしろう訳 徳間書店 2022) ID13912

読みもの

- 『黄金の村のゆず物語』(麻井みよこ著 ポプラ社 2023) ID13906
『手で見るとぼくの世界は』(榎崎茜著 くもん出版 2023) ID13907
『カムイの大地—北海道と松浦武四郎』(泉田もと作 岩崎書店 2023) ID13908
『バーバラ・レオニ・ピカード7つの国のおとぎ話』(バーバラ・レオニ・ピカード作 洋洋社 2023) ID13909

参考図書ほか

- 『はじめての絵本—赤ちゃんから大人まで』(磯崎園子著 ほるぷ出版 2023) ID13910
『令和新版 月瀧の民話』(月瀧お話の会編集 月瀧コミュニティ協議会) ID13913★昔話

23.5月に入る大人の本

フィクション

- 『街とその不確かな壁』(村上春樹著 新潮社 2023) ID18955
『影の王』(マアザ・メンギステ著 栗飯原文子訳 早川書房 2023) ID19005

エッセイ ほか

- 『音楽と生命』(坂本龍一/福岡伸一著 集英社 2023) ID19006
『「自分の木」の下で』(大江健三郎著 大江ゆかり画 朝日新聞出版 2001) ID19007
『母は死ねない』(河合香織著 筑摩書房 2023) ID19008
『本屋で待つ』(佐藤友則著 夏葉社 2023) ID19009
『江戸の女子旅 旅は短し歩けよ乙女』(谷釜尋徳著 晃洋書房 2023) ID19010
『世界の片隅で日本国憲法をたぐりよせる』(大門正克著 岩波書店 2023) ID19011
『新版 三島由紀夫が復活する』(小室直樹著 毎日ワンス 2023) ID19012
『「私のはなし部落のはなし」の話』(満若勇咲著 中央公論新社 2023) ID19013
『自宅で湿地帯ビオトープ! 生物多様性を守る水辺づくり』(中島淳著 大和書房 2023) ID19014
.....

寄贈

- 『一橋桐子の犯罪日記』(原田ひ香著 徳間文庫 2022) ID18986
『逃亡』(帚木蓬生著 新潮社 1997) ID18987
『影踏み』(横山秀夫著 祥伝社 2003) ID18988
『表現者』(星野道夫著 祥伝社 1998) ID18989
『長い旅の途上』(星野道夫著 文藝春秋 1999) ID18990

- 『なぜ、「あれ」が思い出せなくなるのか』(ダニエル・L・シャクター著 春日井晶子訳 日本経済新聞社 2002) ID5580
『天下騒乱—鍵屋ノ辻 上/下』(池宮彰一郎著 角川書店 1999) ID18991/18992
『本能寺 上/下』(池宮彰一郎著 毎日新聞社 2000) ID18993/18994
『川柳うきよ大学』(小沢昭一著 新潮新書 2008) ID18995
『世界から恐れられた七人の日本人』(丸谷元人著 ダイレクト出版 2021) ID18996
『錆びた太陽』(恩田陸著 朝日新聞出版 2019) ID18997
『6カ国転校生—ナージャの発見』(キリーロバ・ナージャ著 集英社インターナショナル 2022) ID18998
『若者、ガマフヤーと語る』(坂本菜の花等執筆・編集 坂本菜の花 2022) ID18999
『ドイツ 町から町へ』(池内紀著 中央公論新書 2002) ID19000
『解きたくなる数学』(佐藤雅彦ほか著 岩波書店 2021) ID19004

★下記3冊は、わが敬愛する友人からの寄贈。

- 『旅から—全国聞き歩き民俗誌』(斎藤たま著 論創社 2022) ID19001
『子どもの言いごと』(斎藤たま著 論創社 2022) ID19002★東京子ども図書館「こどものとしよかん」春号に新蔵書として掲載されていました。
『新まよけの民俗誌』(斎藤たま著 論創社 2023) ID19003

★新刊ホヤホヤ寄贈いただきました。

- 『なぜ炭治郎は鬼の死を悼むのか—昔話で読み解く『鬼滅の刃』の謎』(久保華誉著 草思社 2023) ID19015 *『鬼滅の刃』すごくヒットした漫画のようですが、ご覧になった方は?

「本と出会う」

塚脇 節子 (城陽おはなしサークル)

今年4月に初めて沖縄へ行きました。息子一家の引越の手伝いで、孫のお守りしながらアパートのまわりを散策しました。ガジュマルの街路樹、ハイビスカスの垣根、門柱のシーサーや道ばたの「石敢當」(いしがんと)と彫られた石、那覇の住宅地では普通の風景に、私は興味津々でした。美ら海水族館のある海洋博公園におきなわ郷土村があり、赤瓦の伝統的な民家が移築されています。低い塀やフクギの防風林に囲まれ、開放的な間取りと雨端(あまはじ)と呼ばれる軒下に座っていると水族館の雑踏を忘れる心地よさでした。



フクギの花



フクギの防風林



石敢當

滞在したホテルの1階にはブックカフェがあり、そこで『オキナワの家』(伊礼智著 復刊ドットコム)を見つけました。子ども向きの絵本ですが、沖縄の住まいや風景の素朴な疑問に充分応えてくれる本です。赤瓦の家を街で見つけられないのはなぜ? コンクリートの家ばかりで屋上のタンクはなに? などわかりやすく応えてくれます。作者の伊礼氏は沖縄生まれの建築家で、人と人、家と町がゆるやかに自然につながる住空間を提案しています。



コーヒーを飲みながら、店内の本棚に並ぶ本を自由に手に取り読むことができ、気に入ったら購入もできるブックカフェ。私にはあまり馴染みのない場所ですが、新刊書店とカフェ、古本屋とカフェ、個性的な品揃えのカフェ、閲覧のみのカフェとか業態はいろいろのようです。

最近訪ねたJR敦賀駅前の「ちえなみき」は珍しい公設の書店で、来春には北陸新幹線が敦賀まで開業されるので、駅前の集客、活性化に大きな期待がかかっています。運営は東京の書店が当たり、新刊書だけでなく、絶版本や洋書、古書などが棚にテーマ毎に混在して、見出しのつながりを追っていくと、思わぬ本と出会える様な仕掛けがあります。レゴの遊び場、パズルやボードゲームスペース、ミーティングスペース、自習スペース、それからカフェもあります。外の広い芝生も含めて「ちえなみき」の事業が今後どんなふう展開されるのか楽しみです。

★書店が住民の中に浸透する工夫♥図書館負けられません!! 最近、テレビか、新聞で見たのが、ベトナムの若者によるベトナム語本の書店(一つは、東京四谷で女性:カフェもある。もう一つは、埼玉坂戸で男性:書店の外に読んだ本を交換使用コーナーを設けている)です。元々は、日本にいるベトナムの仲間にと考えて作ったが、日本人も利用しているとか。他国で、個人で頑張っているのが素晴らしいですね。ちなみに、海外で日本語の本の書店は、日本の大型書店がやっている以外はない? みたいです。(敦賀のちえなみきも、ベトナムの書店についても、詳しくは、ネットをご覧くださいませよ。)



今月、文庫に並べる前に・・・(子どもの本)



子どもに向けて伝えたいけど、4月も文庫に来てくれたのは、河津からのKちゃんだけ。そしてゆるかの里分館の1周年も子どもはKちゃん含め、2人だけ。コロナのせい

だけか、呼びかけが足りないのか、でも、来年閉館を前に、慌てず、ゆっくり、ゆっくり声がけしましょ。そして、大人が子どもの本を読んではいけなことはありません。沙羅の樹で子どもの本が好きになった大人、たくさんいますよ。子どもの本なんて、と思ってる方試しにどうぞ♥

絵本:①『やまのこどもたち』②『名馬キャリコ』③『せんろはつづくよ』は1970年代に出た岩波子どもの本の復刊です。①は、今の子どもがどう感じるかわからないけど、素朴で懐かしく、②は、絵と文が漫画のコマのように次々変わって(紙芝居にしたらさらに楽しいのではと思った)、③は訳が詩的でリズムがあって、と、昔読んだ時より心躍り、みんな読み聞かせしたいと思いました。新刊『なんてくさいんだ! ロンドンを救ったジョセフの物語』は、絵も読みごたえもあるけど、物語絵本か科学絵本かどっちかなあ。『2ひきのカエル』は絵も素晴らしく、遠目でもくっきり見えて、読み聞かせに抜群。ストーリーがちょっと穿っていて・・・お薦めです。

読み物:最初に『バーバラ・レオニ・ピカード7つの国のおとぎ話』を。いわゆるお姫様ものですが、今のご時世(男女平等)にはウケないかしら。でも、とても楽しめました。そして、お姫様御伽話は、最高の男女平等物語だと思いましたよ。『黄金の村のゆず物語』は、四国がゆずの名産地になったお話。ついつい馬路村のSちゃんを思い出し・・・。メールしたら、GWも、観光客で大忙しだと♥。『手で見るぼくの世界』は視覚障害の中学生の物語。『たぶんみんなは知らないこと』ID13844『わたしはスペクトラム』ID13846も、『エツコさん』ID13865も、自分の生活外にあると気づかないで通り過ぎて、いや無視してしまっているかもしれない人たち(同じ仲間)。子どもにも元子どもにも知ってほしい世界です。先日、22年度に出たお薦め本の紹介講座がありました。繁内理恵さん『戦争と児童文学』ID13782の話はとてもわかりやすくまた刺激を受けました。次回お薦め本の中で文庫に入っている本をお知らせします。